

## 禅林寺本山越阿弥陀図の成立をめぐる新解釈の試み

慶應義塾大学 北澤 菜月

鎌倉時代以降の作例が残る「山越阿弥陀図」と呼称される作品群には様々なバリエーションが見られるが、阿弥陀如来が画面を上下に分かつ山の端線の向こうから半身を現すのが、基本となる画面構成である。現存する最古の山越阿弥陀図と考えられる禅林寺本がまさにそれにあたる。その着想に、山の端に落ちる太陽、或いは月という実景に基づく構図が考えられているが、この特異な画面の成立については、主に思想背景を問題とした議論がこれまでなされている。

ところで、禅林寺本の画面向かって左上隅には、梵字の「阿」が円相内に描きこまれている。密教がとり入れた阿字は宇宙の本源、ひいては大日如来と同一視される種子であるが、山越阿弥陀図のみならず阿弥陀来迎図中にもこのような作例は他に見られない。禅林寺本については、その解釈をめぐる議論の中で中野玄三氏によってなされた、浄土教の影響下の真言系の作品とするのが現在定説となっているといえる。すなわち、これを真言密教を理論上浄土信仰と結びつけた覚鑿の、阿字を阿弥陀と一体とする思想の反映とし、さらに作品制作の主体としては、覚鑿の思想とともに法然からも思想的影響を受けた禅林寺の僧静遍を想定する見解である。

これに関し、発表者はまず、これまであまり触れられることのなかった、禅林寺本の図様と表現に関しての報告を行い、禅林寺本を様式的に考察することでその特徴について述べたい。

そしてまた、禅林寺本について先行研究とは異なる以下の二つの視座から検討することにより、その成立について再考してみたいと考える。

第一に、禅林寺本の構図が請来系絵画のなかで、とりわけ観経変（観無量寿経変相図）と関わりの深いものであることを指摘したい。禅林寺本の構図には、観者の視線を誘導するひとつの導線が存在する。それは、画面下方中央に幡を掲げ立つ二人の童子の間を通り、重畳する山を経て山向こうの阿弥陀へ到達するという導線である。これと同様の導線を持つ作例のなかでも特に、禅林寺本の構図は観経変の一つである当麻曼荼羅中央の華座壇と共通する点が注目される。さらに、このような導線を持つ点のみならず、禅林寺本をはじめとする山越阿弥陀図の基本図像である正面向き半身の仏の姿についても、唐代に遡る観経変遺品の、左右縁区画中にその淵源を求めることも可能である。

第二に、画面下部に描かれる二人の持幡童子に注目したい。その図像を再検討することにより、禅林寺本の思想的背景に関して、改めて明らかに出来ることがあるのではないかと考える。